

黄色紐の櫛(たすき)は世代を超えて

三 綱 領

正倫理明大義
重廉恥振元氣
磨知識進文明

多士東京

No. 40 2010
5/15

発行/ 済々黌東京同窓会・事務局
〒162-0822 東京都新宿区下宮比町2-18-705 TEL.03-3268-9525 FAX.03-3268-9520
平成22年5月10日印刷 平成22年5月15日発行 発行者/ 郷原 友和 振替/ 00190-1-68705

済々黌東京同窓会の最新情報はインターネット・ホームページでどうぞ! <http://tokyo.seiseiko.jp/>

昭和40年会責任編集

もくじ

所感 東京同窓会長 加藤榮護	2~3	「卒業して三十年」 玉利かおる	13
済々黌東京同窓会 副会長就任に当って 副会長 林田紀久男	4~5	「素晴らしき先輩!後輩!そして同期!」 中村祐治	14
「済々黌再生」 齊藤 惇	6	「済々黌」と「出会い」と「おかげさま」 陣内 満	14
「我が済々黌時代」 佐藤淳也	7	「人生の節目を共に迎えて」 柿木綾乃	15
「父と済々黌」 末田修治	8	学年日より 東京七夕会ほか	16~19
「体力の維持」 赤星慶治	10	事務局日より・編集後記	20
「済々黌、ありがとう」 村田信一	11		



新本館完成予想図(7月)



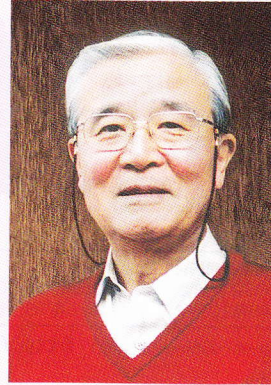
黄壁城



旧本館

所感

平成二十二年二月吉日



東京同窓会長
加藤榮護
(昭和25年卒)

平成二十二年の濟々鬘東京新年会（一月二十二日）に出席して、多士東京の原稿を催促された。

小生は頼まれていたのをすっかり忘れていた。

催促したのは末田修治氏。小生が濟々鬘時代のあの謹厳実直な末田教官のご子息である。

そして今原稿に着手しようとして、過去何年かの巻頭言を見てみたら。毎年酷くなつていく世相を嘆いては、濟々鬘の三綱領の精神を！と叫んでいる。

今年も間もなく濟々鬘の卒業式である。勿論出席し前夜祭も含めて大いに楽しんでくる積りだ。

振り返れば小生は現在七十八歳。数え年では八十歳である。小学校に入る前六年、小学校に六年、濟々鬘に六年、早稲田に六年、浪人時代二年を加えて二十六年間かけて昭和三十三年四月社会人になった。以来約四十五年間ヤミクモに働いてきたと思う。

初めて貰った月給が一万二千円。

愕然とした。会社の寮に入つて月末には人事課長に借金をしたこともあった。

しかし、時期が良かった。兎も角成長期である。

無謀とも思える課題に挑戦できた。

昭和三十九年、東京オリピックの年の五月、初めて渡米、一月半に渡つてアメリカの銀行システムの視察を

してきた。目的はオンラインバンキングシステムの開発のための調査旅行である。

今は亡き某先輩と二人、自由な旅であったが、会社から支給される手当は一日十九ドル。

当時のアメリカの銀行のシステムは小切手の現物処理が花形であり、オンラインシステムには見るべきものが無かった。まだこれから開発しても間に合う。日本では国産のコンピュータを使用している銀行が無かった時代にいきなり国産のオンラインシステムの開発に挑戦させてもらった。

素晴らしい経験であった。正に坂の上の雲を見ながらの挑戦であった。

深夜、ボストンの銀行の小切手処理の現場のコンピュータセンターを見学したとき女性が多く働いているのを見て、「何故女性が夜中に働いているのか？」と尋ねた。

担当マネジャーは「日本では女性は働かないのか？」

「日本には労働基準法があって、女性の夜間労働は禁止されているのだ」と小生。

マネジャーは笑いながら「それはマッカーサーが作った法律か？」といった言葉が忘れられない。

そういう時代であった。

時は過ぎ、バブルが崩壊する前に、ある著名な経済人の話を聞いた。昭和三十年頃、某社の大卒の初任給は一万円前後、そして一九九〇年代には大卒の給料は二十倍にまで上昇した。一方一ドル三百六十円だったドルは変動制への移行で百円から百二十円に下がり、国際的な日本人の給与はそれだけで三倍。給料の上昇している分と掛け合わせると六十倍となる。

我々は果たして六十倍の生産性を上げて居るだろうか？ と云うものだった。

未曾有の大借金を抱え、政治家は経済人はそして若者は、どう生きて行くのか？ やはり挑戦する心を忘れず、我が三綱領を規範として行動しようではないか。

济々鬻東京同窓会 副会長就任に当って



(株)NIPPO
代表取締役会長
林田 紀久男
(昭和33年卒)

私は、このたび幹事諸侯の推挙をうけ、济々鬻東京同窓会の副会長に就任することになりました。

尾浦副会長が永い間、東京同窓会のために御尽力され、その献身的な活動のお話を聞くにつけ、役割の重大さを感じつつ、ここに自己紹介をさせていただきます就任の挨拶と致します。

昭和十五年に熊本市で生まれ、硯台小学、龍南中学を経て济々鬻を昭和三十三年に卒業した。卒業五十年の感謝の会も無事終わり、昨年は古稀祝いの忘年会が、泉洋

介君の呼びかけで藤田先生、谷副会長を迎えて盛大に開催された。

私は現在、株式会社NIPPO（旧社名日本舗道株式会社、連結売上高・四千億円）の代表取締役会長就任一年目である。また、社団法人日本道路建設業協会の会長に就任しているの、同じく社団法人の日本道路協会の副会長をはじめ、財団法人など十二の団体の役員を拝命。日本経団連の理事も務めている。

私が济々鬻に進学したのは、父も兄も济々鬻を卒業しているの、当然私もと思ったからだ。

大学は、济々鬻の隣の熊本大学の工学部土木工学科に進学した。

土木工学科へ入学後の四月に、济々鬻出身者の歓迎コンパが開催され、そこで私の道づくりの人生がスタートすることになった。

四年生の倉原良民先輩（昭和三十年卒）が、俺は卒業後日本舗道に入社予定。济々鬻出身で、日本舗道への入社は二人の先輩に続いて三人目となる。三年生、二年生も

一名ずつ入社志望が決まっている。六人目を一年生三人の中から決めるよう言われ、私が志望することにした。予想もしない進路決定の瞬間であった。

私が、日本舗道（現NIPPON）に入社した当時は、名神高速道の建設や、各地の道路舗装も始まったばかりであり、弊社は道路舗装の最大手として大変忙しい時であった。入社四年目から工事所長を拝命したことが私を成長させた大きな要因になった。

九州支店の若手所長としての担当は、突貫工事の連続で日々決断を積み重ね、リスクには早急に対処し、工事を工期内に完成させ発注者の満足のもと利益も出して工事が終わる毎に自信を持った。

今考えると無意識の内に三綱領の教えで物事の対応、決断をしてきたのではないかと思っている。济々鬻の先輩や多くの皆様の支えにより、二〇〇五年に株式会社NIPPONの社長に就任し、昨年無事に務めを終え会長に就任した。身に余ることと思っている。

現在弊社の社外監査役に就任された窪田 富先輩（昭

和三十年卒）の話によると、济々鬻に山室記念会という奨学金制度があり、成績が一番で卒業した者一名の資格を満たして、奨学金を貰ったことである。

そんな制度があるとは知らなかったが、山室宗文、宗武氏の叔母にあたる山室宗全（細川藩外医長）の娘、山室千代が細川藩の侍医林田安静（曾祖父）に嫁いだ縁で、祖母の従兄にあたる山室兄弟について最近調べてみると、宗文・宗武いずれも济々鬻出身で、宗武は陸軍中將、宗文は三菱銀行を経て三菱信託銀行の初代社長となった。山室宗文氏の功績と意志により昭和二十八年より山室記念会は当初特別に济々鬻一名枠の一千万円の資金で始まったが、現在では、三菱UFJ信託奨学財団になり、大きな社会貢献活動となっている。

遠い縁者である山室宗文大先輩の济々鬻生徒への熱い思いを知り、私も益々济々鬻への感謝の念を強め、微力ながら同窓の皆様や在鬻生徒のお役に立てればと思っていますところである。

特
別
寄
稿

「済々黌再生」



東京証券取引所グループ社長

齊藤 惇

(昭和33年卒)

教育は国の柱である。

西欧列強がアジアを襲った時、他のアジア諸国と違って、日本が自己防衛出来たのも多くの東洋流高等教育を受けた人間が居たからである。

我々は政治や企業の経営の在り方についてしばしば「時代に合わない」と言う。

しかし、よく足元を見ると国家の根幹たる人材教育を最も時代に合わせていないのではないか。

地球がフラットになり常に諸外国と一体となった交渉や競争が日常化した現在、建設的な意味で本格的に国が守れる人材を多数持つことが非常に重要な事となっている。

その為に求められる人材は明晰な頭脳、体力、気力、胆力の備わった活力ある人間である。

昔の人材が武器を自由自在に扱った如く、現代では論理的説明力、交渉力が求められる。

済々黌を現代の先端を行く日本有数の教育機関に転換することを提案したい。

勿論、提案は破壊的であり常識的なものではなく、多くの批判をお受けすることを覚悟の上である。改革は常に破壊や混乱を伴う。

まず、経営形態を公立私学合体系(P P P方式)に変える。純粹の県立色を強く出すために、出来る限り県予算と全国の企業、個人からの寄付による組織とする。

これは文部省官僚の全国一律的指導に

よる大量生産的な教育を避けるためである。

生徒は全国から募集し、教職員は出来れば世界から優秀な人材を集める。モデルは大分県にある立命館アジア太平洋大学である。

明治時代や現在の韓国同様、数学、理科は完全英語で教育する他、学科としての英語は必修とした上で選択制として中国語を教える。

教育内容は原則ハウツー的なものは排除し徹底した基礎教育に徹し哲学、論語なども必修とする。

全寮制、男女共学で全員何らかのスポーツを選択させ体力、忍耐力、挑戦力を身に付けさせる。

成績上位者は入寮費以外無料とする代わりにあまりに酷い低成績者は落第、退学処分や他校への転校指導を可とする。

このような制度を取り入れた済々黌が実現すれば熊本が日本は勿論、世界有数の教育県として名をなすことは元より、長年にわたり国際的にも活躍する日本の

政財界の指導者たる人材を輩出することとなるであろう。

以上のような提言は夢物語かドンキホーテーのように思われるかもしれないが、米国で十年勤務し、諸外国で多くの学生を採用し、いくつもの外国との商談をなしてきた五十年にわたる経験から言えることである。

英米で採用した大学卒の学生の殆どが親からの資金援助ではなく、素封家の寄付を基金とする奨学金を受けていた。

学業優秀、品行方正で健康でなければ奨学生に選ばれない為に猛烈な勉強とスポーツに打ち込み、多くの学生がアルバイトをしていた。英米の上流家庭では自分でお金が稼げるまで子供は絶対エコノミークラスの乗り物にしか乗せない。

私はここで、社会が一体となって次世代の大人を育てている実態を見た。

一言で言うと、心身共に強健な次世代の人間を作る伝統があるということである。

艱難に耐える、頭脳明晰、健康な人材を

どれだけ持っているかによって国運は決する。

途上国といえどもその真実を学んでいる。

トーフルという米国の英語検定試験の受験者も合格者も、その成績も韓国の方がはるかに日本を上回っていることを日本人は知っているのだろうか。

わが日本の将来を真剣に思えば万難を排して済々黌の再生に取り組むべきだと思うが、如何なものだろう。

「我が済々黌時代」



(株)ブリヂストン
代表取締役専務執行役員
佐藤 淳也
(昭和40年卒)

高校時代の私は、運動といえは故郷、小国の自宅近くの清流で鍛えた水泳が得

意な位で、他の運動神経に優れた「わろごろ」には遠く及ばないし、全校マラソン大会では数少なかった女生徒、それも憧れのマドンナに抜かれて屈辱感で落ち込む程度の能力。成績も1年の時にはクラス委員を務めていたが、その後は泣かず飛ばず、特に数学が苦手です3年になった時には早々と国立をあきらめ、理系のテストを回避できる私立に絞るなど、鬢風通り恩師竹原先生始め個性あふれる先生方と、その上を行く生徒の集団の中ではどちらかといえば目立たない平凡な済々黌生でした。

緑の卒業アルバムを久しぶりに紐解いてみるとなつかしい友の顔がだれもが丸坊主にてかたかに汚した黄線帽子をかぶって穢れないまっすぐな視線で、卒業して45年後の自分など知るよしもなく笑っている。当時の社会情勢はまだ自家用車の保有台数が220万台と現在の5800万台には遠く及ばず大学出の初任給二万円と日本経済も現在の新興国並みの力量であったが、東京オリンピック

が在学中に開催されるなどの明るい話題も多く、活力があり、そうガツガツせず
に高校三年生のはやり歌などを歌いなが
らの修学旅行（京都・東京）など学校生
活がたのしめていたように思う。

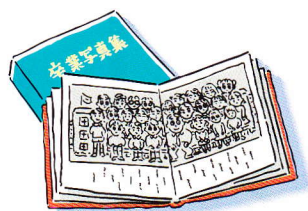
卒業して45年、今年63、4の壮年を迎え、
不器用でいつまでも純粹。人が良くて強
がりだけと家族を始めお世話になってい
る方々に感謝しているが、口には出さな
い恥ずかしがりや。「人に後ろ指を指さ
れるようなことはしたくない、人間とし
てまっとうな道を歩きたい」が行動基準。
J・Fケネディーの大統領就任演説に感
銘を受け、憧れの女性はときかれれば昔
も今も「吉永小百合」と応える。

私の周りにいる同級生を括るとそんな
実に気持ちのいい友人ばかりであふれて
いる。振り返ってみるとこれを生み出し
ているのは我等の母鬢、涸々鬢の三綱領
の精神そのものではないかということに
気づく。

又、この三綱領の精神は企業経営にお
いても活動基準としていわばそのまま企

業理念としても十分通用する教えだと思
われる。今日、どこの企業も企業理念と
企業の社会的責任CSRを重視して経営
に当たっているが、これはまさに「正倫
理 明大義」であり色々な企業の不祥事
を見るにつけ建学の精神の先見性を誇り
に思う。

帰りたくても帰りようがない少年時代
だが、我同級生は激動の昭和を駆け抜け
まだ全員少年のような瞳を輝かせて母鬢
と故郷熊本、さらには日本のために三綱
領の精神をバックボーンに元気を出して、
後輩のためにも恥ずかしくないように一
生懸命生きていることを見るにつけ勇気
づけられ、今後自分もそうありたいと強
く願う。



「父と涸々鬢」



日本コークス工業、旧三井鉱山
常勤監査役

末田 修治
(昭和40年卒)

父（末田修二）は、戦後長く涸々鬢（中
・高）の教職に在った。

大正3年に広島で生まれ、広島島の旧制
中学・広島高校を経、東京帝国大学文学
部東洋史学科に入り、昭和12年に卒業し
て地元広島島の師範学校の助教となった。
暫くして軍隊（近衛連隊）に入り、仙台
の予備士官学校を終え、近衛連隊に将校
として戻り、南支の戦線に征き、台湾軍
司令部に移り、さらに終戦まで熊本陸軍
幼年学校の教官（文官であったが、中尉
相当官として軍服を纏い、長剣を吊って
教壇にたったいた。）であった。戦後緑

があつて中学済々黌の教師となり、私が済々黌に入学する昭和37年までの15年間、済々黌にいた。この間、昭和27年卒年次の担任を務め、のち概ね3—4年毎に担任したクラスでの卒業生を送り出した。

その後、済々黌から熊本高校、第一高校へ移り、退職後は熊本大学文学部大学院の研究生となる傍ら、私立学校の教師もつとめ、地元の公民館長などをして老後を過ごし、平成4年七十八年を一期に他界した。

以上が父の略歴である。

私は、物心ついた時から間接的に済々黌を知り、3年間を実地に接した。父子18年の係わりの中、父の教え子の幾人かの先生から教えを受けた縁も出来た。

父は、教え子の成長が何よりも嬉しかったらしい。正月には、卒業生が多く訪ねてきたが、下戸の父は、母に多量のぜんざいを作らせ、酒とともに客に供した。卒業生の中には、酩酊の度を過ぎ、障子を破る、大声を発する輩もいたが、父はただにこにこ笑っていた。終わりはい

つも黌歌であつた。お陰で姉弟は卒業生ではないが黌歌が歌える。

先輩から、父は、頑固で融通が利かず、よく怒っていたと聞くが、私には、涙もろくて優しかったという記憶が多い。また、劣等生が好きであつたようだ。

済々黌の父の教え子は全て私の先輩に当たる。先輩の劣等生の一人に、日本のそこそこの大学を出て渡米し、苦学の末に米国の大学で農学博士号を取得した人がいて、博士号のコピーとともに近況を書き送ってきたときは、大粒の涙を流し、「よう頑張ってくれた。立派に成ってくれた。」と我がことのように大喜びしていた。

父の口癖は「済々黌は、人を育てる学校。皆大きな潜在能力を持っている。在黌時の学業成績はほんの側面。学び舎は、人生の助走台。」「頑張れ、頑張れよ」であつた。

また、ある先輩は地方出身で成績が悪く、職員会議で放校の話が出た。父は心配して、その父君を呼び、事の次第を話

したところ、その父親は「何ば言いよつとですか 学業は学校で教えつとでしようが 教ゆつとは学校に任せとります 教え方が不十分で放校とは何事ですか」と。父は成る程と思ひ、下宿中の嫌がる先輩を週に二度三度呼び、先輩の不得意の英語と国語の家庭教師をしていた。平成に入り、件の先輩に仕事の都合で何度かお会いする機会に恵まれたが、先輩に「あの時、小学生位で部屋をちよろちよろしていたのが君か」といわれた。その先輩は地元の議員も勤められ、某会社の社長をされ、今は会長をしておられる。

今は問題になるのかも知れないが、父はよく試験の答案を持ち帰り採点をしていた。赤点を付けるのが厭らしく、点数の足らぬ答案用紙と向き合い長時間苦戦の体であつた。結果は知らぬが、先生は赤点をつけるのに苦労するものだと知つた。悩むくらいなら、もつと易しい問題にすればいいのと思つていたが、そうはいかぬらしい。後年、私も数学の先生に苦労をかけた。

まだ多くの話があるが、以上は記憶の断片として：

卒業生に向けた父の短歌

「現身（うつしみ）は 永遠（とわ）には二度と 享（う）け難し 享ける甲斐ある 世を送らばや」

自宅に紺色地の濟々鬢の鬢章の入った風呂敷が二枚あるが、一枚には折々に父が書き残した原稿類が包まれ、今一枚は母の手元にある。何かの記念に作られ頂いた物と思うが、今では色褪せ古ぼけている。姉・弟・孫らは「おばあちゃん、これもういいかげんに捨てたら」というが「いいえ、私のいるうちは捨てません」母にも濟々鬢の思い出がぎっしり詰まっているものと思う。



昭和24～25年頃 戦災を免れた南鬢舎窓辺にて
父・末田修一

私は、濟々鬢3年、卒業して45年多くの鬢友に恵まれて安穩に暮らしているが、父の思いに応え得ているものか、内心忸怩たるものがある。が、来し方に多少の悔いはあるものの、後悔は余りない。父の「頑張れ、頑張れよ」という声が聞こえる。今からも頑張って精進していきたい。

「体力の維持」



海上幕僚長 海将
赤星 慶治
(昭和44年卒)

私は現役の海上自衛官であります。昭和25年生まれであり、今年で還暦を迎えます。「精強性」を維持するため若年退職制を採っている自衛隊の中にあつては、最長老の部類に属することになりま

す。ほとんどの自衛官は50歳台半ばで定年を迎え、60歳前後まで勤める自衛官は一部の配置、職種に限られ多くはおりません。

精強性には、分かりやすく言えば、年配の自衛官であつても、20歳代の若者達と同じような行動を取ることが出来る体力が求められるということも含まれます。このため、大多数の自衛官には、体力の維持、向上には相当気を使う習慣が身につけております。最近の健康志向の一般社会においては、スポーツジムに通ったりジョギングをしたり等様々な方法で、体力の維持向上に努める人達が見受けられます。自衛隊ではこれらに加え、部隊内でよく徒手体操（ラジオ体操的なもの）が行われ、体力維持等の一手段にもなっています。

ところで帝国海軍においては、「海軍体操」というものが海軍軍人の体力の維持向上に大いに役立っていました。この「海軍体操」を確立したのが、大正8年に母校を卒業し海軍兵学校に進まれた堀

内豊秋海軍大佐であります。

堀内海軍大佐に関しては、別の話で知っている方も多いと思います。

大佐は先の大戦初頭、我が国最初の落下傘部隊を率い、インドネシアのメナドへの奇襲降下作戦を成功させた指揮官であります。占領地では善政を敷き、現地住民の信を一身に集め、慕われた人物でもあります。しかしながら終戦後は、先勝国側からの言いがかりに近い部下の過失に対する責任を問われ、B級戦犯指定を受け、オランダ軍法廷に召還されました。大佐を知る住民、現地の弁護人の懸命の努力にもかかわらず、有罪とされ、昭和23年9月銃殺刑に処せられました。その後メナド市は大佐の慰霊碑を建立し、今でも大佐の功績は語り継がれているそうです。

この堀内大佐が海軍砲術学校の教官として在職中、身体の柔軟性促進を目的としたデンマーク体操に注目、これを日本人向けに改良、そして自身の体験でも体向上の効果を確認し、それまでに行な

われていた海軍体操を根本から改良、新しい堀内式の「海軍体操」を考案したのであります。堀内式の「海軍体操」は、後に広島県江田島の海軍兵学校でも正式に取り入れられ、兵学校生徒等の体力維持等に大いに貢献することになります。

一般的に徒手体操は、体の関節を曲げたり、伸ばしたり、全体の捻転、あるいは軽く飛んだり等の軽い運動のようですが、真剣に行えば体の柔軟性や筋力の維持に相当効果があるものと思います。我が国でラジオ体操が国民の中に定着しているのは、早く目が覚めるようになった熟年の暇つぶしではなく、その効果が十分に認められているからに他ならないからではないでしょうか。

海上自衛隊には、海上自衛隊体操というのがあります。これも真面目にキチンと行えば汗がにじむ程体力を要するものであり、毎日続ければ身体の柔軟性を保ち、体力の維持に十分に寄与で出来る体操です。

体力の衰えを実感している今日この頃、

まめに体を動かし、出来るだけ歩くことに心がけて生活しています。そして毎朝、海上自衛隊体操と腕立て伏せを行うことに意を用いている昨今であります。

「濟々贗、ありがとう」



熊本県副知事
村田 信一
(昭和44年卒)

熊本県副知事の村田です。濟々贗東京同窓会の皆様には、常日頃、多面的にお世話になっており、誌面をお借りし、厚く御礼を申し上げます。

熊本県では、東京大学教授から政治家に転身された蒲島知事が誕生して2年。そして、小生が副知事を拝命して、早いもので1年が経過しました。この間、「蒲島丸」は、百年に一度の世界的大不況、

本格的な政権交代といった荒波を受けながらも、財政再建、川辺川ダム、水俣病問題などに着実に取り組むとともに、「生まれて良かった、住んで良かった、これからもずっと住み続けたい」くまもとの夢の実現に確かな航跡を刻みつつあります。

私は、濟々鬢を昭和44年に卒業し、同48年から県庁に奉職しましたが、私の記憶が間違いないければ、濟々鬢出身の副知事は昭和50年の小山岑雄副知事以来の就任となります。現在、濟々鬢出身の熊本県職員（警察、教育関係を除く）は、約500人近く在職しており、県職員の1割近い数字となっています。蒲島知事の公約である「県民幸福量の最大化」を目指して、多くの同窓生が、郷土熊本で「元気を振って」日夜頑張っています。東京同窓会の皆様方にも、引き続きふるさとの応援方、よろしくお願いいたします。

さて、私の濟々鬢時代は、団塊の世代の終盤で受験戦争も厳しい中ではありましたが、多くの楽しい記憶が昨日のよう

によりがえります。その中でも、正に多士濟々の友人との思い出が、黄な線と下駄履きとともに懐かしく思い出されます。この年になって、久しぶりに再会すると、お互い「いやー。ぬしゃー、変わらんねー。」と開口一番。シツカリ者はシツカリ者、マメな者はマメな者、悪ゴロは：とまでは言いませんが、ほとんどの友人は当時そのままのように感じます。どうも、人間は高校生ぐらいにはその「人となり」は完成しているものですね。時間をタイムスリップして、高校生に戻ったような感覚で話している自分を感じるのは、私だけでしょうか。でも、悪く言うと、成長していないと言われそうですが、様々な立場に、多くの愛する友人がいることは幸せなことです。

その友人との思い出の一つ。2年生の冬休み、濟々鬢から阿蘇山上まで60キロを、6〜7人で一晩中歩く、いわゆる「遠歩」をしたことがあります。当時は、ウインドブレーカーのようなものは無く、通学用の雨合羽を防寒用に着用し（当然、

黄な線もかぶって）、阿蘇の山肌を山上まで這い上りましたが、途中、腰にぶら下げた水筒がシャーベット状に凍っていました。多分、氷点下の状態の中を翌日の昼頃まで、ワイワイ、時には黙々と、今思えば、無謀とも言える遠歩でした。60キロをただただ走破するだけの、ただそれだけの旅でしたが、友達と味わった山上での満足感は今でも忘れることが出来ません。こんなたわいない話が「くだらない」程たくさんありましたが、こんな思い出多い濟々鬢時代は、私の良き青春の宝です。それが今の私を活かしているように思います。濟々鬢、そして多くの友人、ありがとう。



卒業して三十年

フリーランスアナウンサー
共立女子大学文芸学部講師外

玉利 かおる (昭和55年卒)



卒業して早30年、
考えてみると在巒3
年間の10倍の月日が
流れている。世の中
も私も変わった。

同じ学校の記憶。楽しいことばかり思
い出す学生時代。受験勉強は二の次、自
転車で、応援に通った、藤崎台球場。高
3の夏、甲子園出場が決まって高速バス
で甲子園まで応援に行った。カチワリ、
麦わら帽子・・・

そんな甲子園出場の震えるような若き
日の感動を共有している友とは、兄弟の
ような感覚とでもいうのだろうか

先日、55会で旅行を企画するという話
をしていて、「50になったら、男も女も
雑魚寝でよかる？」などと言っていたが、
あと1年？それは、とんでもないわ!!レ

デーですもの。ところで、私はおかげ
様で早くから、東京同窓会には、関わっ
てくれた。

今もそうだが、東京同窓会の司会をさ
せていただくチャンスが多かったからで
ある。そして、やはり学年幹事の黒田
君とは、いつもセット。彼は本当によく
やつてくれていて頭が下がる。応援団と
いうこともあり巒歌の斉唱で、音頭をと
る。

最初は、東京同窓会では、何のお話を
したらいいのか戸惑うところもあった。
しかし先輩方は、本当に優しく大きく迎
えてくれた。幹事学年を経て、私達もよ
うやく同窓会に大きな顔をして参加でき
るようになり、ようやく慣れて食事も楽
しめるようになってきた。

今は、後輩を迎える立場になった。い
ろいろお世話してくださった、先輩方の
気持ちがよくわかる。やはり、母巒、後
輩に愛情がないとできないことである。

お会いする同窓の面々も、毎年、いや
3年に1度の時もあつたが、幾度となく、

お会いしているうちに、身内になってく
る。

上京して、まもなく25年になるが、転
勤族の父のおかげで、8年しかいなかった
熊本の記憶は、涸々巒とともに深く刻
まれている。

だから母巒の正門の前に立つと、なん
ともいえない心地よい緊張感に包まれる。
半生を振り返り原点に戻れるのだ。

そのころは、自分が東京にでて、キャ
スターをやるなんて考えてもいなかった。
熊本を出ていく自分のエネルギーにび
っくりである。仕事一筋だった私も、今
は大学で講義をし、自分のエリアで放送
の仕事も続けつつ、子供も授かり、自分
なりのバランスをとりながら、人生をエ
ンジョイしている。自分のことを少し遠
くから、見られるようになったというこ
とだろうか。



「素晴らしき先輩！後輩！
そして同期！」

(株)ベニレイ農水産部次長

中村 祐治 (昭和57年卒)



「母校愛」、卒業した学校を愛すると言う意味で一般的に使われる言葉である。

かなり抽象的な言葉でもあり、説明には時間を要する。

濟々鬢を卒業して20数年経ち、おぼろげながら自分なりに理解出来るようになってきた。社会人になり、家庭を持ち、子供が生まれ、四苦八苦しながら生きてきた人生。既に折り返し地点を過ぎ、後はゴールを目指すのだが、ゴールまでの道程をどれだけ充実したものにするか、仕事も家庭も大事なのは重々承知でだが、出来るだけ自分の時間を大切にしていきたい。

会社、家庭では話せない悩み、愚痴を腹の底から語る事の出来る先輩、後輩、

同期、この関係を大切にしていきたい。

これからゴールまで色々なアクシデントが起きるかもしれない、その時は大変身勝手であるが、沿道の声援を味方にして最後まで完走するつもりだ。「母校愛」は簡単には実感出来ない。多くの先輩、後輩、同期と付き合う事で、自然と身につく感覚だろう。

最後に「濟々鬢」と言う素晴らしい環境を与えてくれた先輩、後輩、同期に感謝したい。

「濟々鬢」と「出会い」と「おかげさま」

(株)電通 陣内 満 (平成5年卒)



今年、35歳になった。濟々鬢を卒業したのが18歳。高校生までの人生と、高校を卒業してからの人生がちよと半分になった。振り返ってみても、今の自分自身があるのは母校のおかげである。

「濟々鬢」という高校を強く勧めてく

れたのは、小学校の恩師S先生である。

濟々鬢を卒業して小学校の先生をされていたS先生と出会ったのが私が小学校3年生の時。夏はソフトボール、冬はサッカーの部活動で指導していただいた。小生の僕たちに決して手を抜くことなく、ソフトボール・サッカーをされていた。手を抜くどころか、私たち以上にスポーツを全力で楽しんでいたS先生。

「恩師のような先生になりたい。」S先生と同じ高校に行き、同じ学校の先生になることを真剣に考え、熊本の中でも荒尾という田舎者だった僕は、学区外受験を決意し、なんとか憧れの濟々鬢に入学することができた。

高校入学後は部の存続の危機であった応援部に入部。とにかく厳しい先輩。学校は休んでも、部活は来いとこの指導で、熱が38度越えて学校休んでも部活動には行っていた。入学時そこそこ良かった成績もウナギ下がりになってしまった。三社面談では担任の先生の言うことは何も聞かず、母親が泣き出したのを覚えて

いる。

しかし、得たものはとても大きかった。僕も含めて高校時代はクラスで最下位の成績だったけど、未だに付き合いが続いている友人たちだ。高校時代から未だに公私にわたる相談にのってもらっている、スリランカで学校の先生をしているT君。僕が勤めている今の会社を教えてください、就職活動をした時、毎週土日に徹夜で作文の添削をしてくれた、NHKの記者をしているM君。

济々鬢を勧めてくれた恩師と出会わなければ、僕は地元の高校に入学しただろう。济々鬢がなければ、未だに付き合いのある、人生の節目節目で支えてくれた友人と出会わなかっただろう。その友人に支えられて、2年の浪人を乗り切り東京の大学に行くことができた。そこで現在の妻と出会った。1年の留年を乗り切り、現在の会社に入り、3人の子供に囲まれ生活している。

自分の人生を振り返ると济々鬢を通じて出会った恩師・先輩・友人に支えられ

て今があると強く感じている。だからこそ、「おかげさま」の心を忘れないようにしている。「おかげさま」の心を強く育んでくれた济々鬢。多くの「出会い」を与えてもらった济々鬢。本当に感謝している。

人生の節目を共に迎えて

青山学院大学 学生

柿木 綾乃 (平成20年卒)

「ひさしぶりー。」「元気だった？」

私たちの再会は、卒業してから二年という時を越えて盛大なものとなった。今年一月、平成二十年に卒業した私たちは成人式を迎えた。その二日前の一月九日に济々鬢の学年大同窓会が熊本で開催されたのだ。

学ランに夏はねずみ色をしたセーラー服を着ていた私たちだったが、当日は男の子はスーツ、女の子はドレスアップということもあり、その場にいる誰もがキラキラと輝いて見えた。二年という月日

の間に見違える程洗練された友人たちの姿を見て、私も少しは成長できているのかしら、と考えてしまった。

济々鬢を卒業し、それぞれの道を歩み始めてから、長い歳月が経ってしまった。久々に会う同期ばかりで話の輪に入っていけるだろうか、という不安があったのだが、さすがは济々鬢卒業生である。会えなかった日々を越えてすぐに昔のように打ち解けてしまった。

济々鬢生の絆は強い。東京の大学に通うために上京をして心細い時も、やはり心を開いて話すことができたのは济々鬢の友人であったし、東京にいる济々鬢の先輩方は誰もが優しく親身になってくださった。私たちは今回の成人式のように、これから先に就職、結婚、出産という人生の節目を迎えるだろう。先は見えず、不安で仕方がない時も来るかもしれない。しかし、私たちには強い絆で結ばれた仲間たちがいることを忘れずに、前に進んでいこうと思う。

学 年 だ よ り

東京七夕会 二〇〇九年の経過報告

世話人 宮本純男(昭和25年卒)

二〇〇九年の東京七夕会は、四月一日、第二金曜に従来通りの西五反田、簡



易保険会館(ゆうほうと)にて、午後一時から、開催されました。

会計年度は、東京七夕会開催の日から、次期開催の前日までとされています。

東京七夕会開催の日に会計報告と経過報告を行い、参加会員に新名簿、その他を渡し、不参加の会員には、それ等と年会費納金用の振込用紙を郵送しています。

二〇〇九年度の年会費(上納金)は、四四名分で、東京同窓会事務局に納金しています。深謝!! 熊本同窓会への学年単位の上納金、二万円は二〇〇八年より中止となっています。

さて簡単に二〇〇九年中の経過報告を行います。

★一月二三日・恒例、事務局主催・新年会・銀座・並木通・三笠会館・出席者四名(甲斐邦朗・加藤栄護・安田昌資・宮本純男) 藤田八郎先生・ご出席。

★四月一〇日・東京七夕会・西五反田・ゆうほうと、出席人員三四名(会員二五名、役員・尾浦武昭副会長。他に日野信也〈三一卒〉遠山徳一・長谷川

孝道・&奥様方(遠山・長谷川・加藤栄護・加藤順久・米村啓介) 日野氏から、兄・日野奎三(二五年卒・玉名市在住・脑梗塞後リハビリ中) 君からのメッセージを代読して戴きました。

乾杯の音頭は長谷川孝道(熊本より上京) 遠山徳一(名古屋より上京) 両君をお願いしました。締めめの賛歌斉唱・万才三唱は世話人の宮本が行う。今回の東京七夕会開催で特徴的だったことは、奥様同伴が五組もあった事で、大へん華やいだ会となり、びっくりするやら、感謝しています。来年の東京七夕会にも是非、ご参加戴きたいと思えます。実は今回の案内往復ハガキでのアンケート結果は、奥様同伴は、一名のみだったものですから:

★五月三〇日(土) 濟々鬢東京同窓会総会。私学会館・五七年卒実行委、出席者は四名(加藤栄護・中村明・松沢賢吉夫妻・宮本) 藤田八郎先生も出席され、乾杯の音頭を、とられました。

★一〇月九―一〇日。第四三回、東京七



★十一月二日・熊本県人会・東京ドーム
 夕会ゴルフコンペ、随縁CC↓鬼怒川観光ホテル、熊本から武内学・長谷川孝道氏が参加、プレイは七名（武内学・長谷川孝道・加藤栄護・高木久五郎・中村明・松尾準雄・渡辺恒人）宴会のみの参加は宮本。幹事は長谷川孝道、渡辺恒人・優勝は長谷川孝道、準優勝は松尾準雄、三位は渡辺恒人・次期幹事は長谷川孝道（正）加藤栄護（副）

ムホテル、B1・天空の間・出席者は六名（加藤栄護・遠山徳一（名古屋より上京）中村明・米村啓介・渡辺忠士・宮本純男）

★永眠・宮本明・岩村武兵衛・神代武敏
 ・山部令介・上田隆明・千賀秀通・平井眞治・横山二郎・古木秀生・渡辺澄夫・日野奎三

★幹事会・三月二四日・七月四日・一月二五日。

東京二十八期会報告

岩永忠（昭和28年卒）

★忘年会（写真）

十二月十三日（日）十二時より表参道のNHK青山荘に二十名ほど出席して開催。昨年同様藤田先生や東京同窓会から谷、尾浦副会長、郷原事務局長にも御出席を願った。今年も熊本から深田、細郷君が出席しましたが、細郷君は病気療養中を無理して出てきた由で途中で退席。



熊本に帰って直ぐ入院ししばらくして亡くなりました。十三日が最後になろうとは痛恨の極み。

★その他

一、熊本二十八期会は今年で最後となり、四月二十八日に「めるばるく」で開催。県外からも多数参加があった。

二 訃報

細郷篤、山隈孝雄、高木正義、山口（緒方）敏子、鬼塚慎二、柴田昌昭、島村研理、古川邦夫君

29年会より報告

尾浦 武昭（昭和29年卒）

昭和35年頃のことであった、と思うが「29年だけで、いっぺん集まらんや？」と小生のところに言ってきたのが渡辺（幸男）君であった。新宿西口の小汚い蕎麦屋の2階が（今のバスターミナルの辺り）で第1回の会合を開いたのが濟々豊東京29会の始まりである。その後「継続こそ、力なり」をモットーとして、平山 玲是君（後の東京税理士会会長）が、鋭意努力され会は存続された。昭和46年にわたしが小さな会社を設立した時に、「どうせ仕事もあんまりなからうけん、じぶんがところに事務局はおかんや？」と云う、ひどい理由で、わたしの会社に

事務局を置く事にされた。今考えると会社も、会も良く維持できたものであると思う。濟々豊創立100周年記念大会の実行担当学年を仰せつかり（昭和30年卒との共同事業）それを機として同期生の絆がさらに深まり現在に至っている。

6年前には卒業50周年記念誌を発行した。現在では、一年一度の総会、新年会、毎月の第一土曜日に集まる（1士会）、また折に触れ少数ではあるがゴルフ会、カラオケ会なども行われている。東京の動きに刺激されて2年ほど前より関西でも財津（章）君が発起人となり関西29会が発足し今も盛んである。本家の熊本でも「今年は、なんかしらか？」と云う話が出ているとの事であるが、本家にまで影響を与えているのを誇らしく思う。

ただ、ひとつ残念なことは、25年、28年の諸先輩学年に比べてわが学年は病人が多く、何かの会を開催しても参加してくれる人数が少なくなってきた事である。本年度で後期高齢者の仲間入りをする我々であるが濟々豊東京同窓会の一員と

して出来るだけ長く続けたいと考えている。

あるすし屋の集い



益田 修治（昭和40年卒）

築地市場から10分ほどの所に「つきじ寿司」がある。石原純（東京同窓会幹事長、（株）イシハラ社長）の行きつけの店で、親父さん、店長ともに気風がよく楽しい江戸前の寿司屋さんである。築地にはたくさんさんの寿司屋があるが、石原君はいろんな寿司屋を数ヶ月間にわたって食べて回り美味しくて、安価なこの店を見つけたという。後述の事情もあつて中々の濟々豊通でもある。

石原君を核に同期の田中清文（ヤクルトーヤクルト商事専務）、末田修治（三井鉱山専務ー日本コークス監査役）、太田黒健次（大塚製薬）と私などが常連で、時々横浜在住の迫順一（二富士設計社長）、中村勇（日立造船部長ーユニバーサル造

船―日本ブスネス取締役)、佐藤淳也(ブリヂストン専務)、林田季任(丸善油化商事専務)、徳永慶八(佐久間製菓社長―アップルコーポレーション社長)が参加する。店では熊本弁が飛び交うが不思議と違和感がない。集まりは月に1、2回のペースだが、大概は石原君が召集し、会えば恰も昨日の続きのように話が弾み、お酒も進む。皆、白髪が増えたり髪が毛が薄くなったり相応の歳になったが、気持ちは若い。が、話は同期生の消息、熊本のこと、孫のことや昔話などが多い。話が一段落して、気分が乗ると誰言うとはなしにカラオケに行ったり、勝ち負け度外視でマージャン卓を囲んだりする。

お店には、石原君が焼酎の一升瓶をキープしており、瓶には「濟々鬻」のラベルが貼つてある。お店はこじんまりしており、家庭的な雰囲気、なぜか熊本に居るような錯覚さえ覚える。

石原君の縁で、店には歴代総会担当学年有志、郷原友和(昭和53年卒―弁護士)、中村祐治(昭和57年卒、ベニレイ)たち

も時々現れ、話が盛り上がる。常連に栗山雅敏(吉富製薬―エーピーアイコーポレーション副社長―監査役)が去年までいたが、退任後京都に戻ってしまい、「常連」から抜けたことは寂しい。今後この会のメンバーが欠けることなく、一日でも長く続くことを願わずにはられない。



他地区同窓会便り

濟々鬻福岡同窓会開催

平成22年度濟々鬻福岡同窓会が左記により開催される旨同窓会実行学年(昭47年卒)福島直さんから連絡がありましたので、概要をお知らせ致します。

会日 平成22年7月24日(土)

15時受付 特別講演、

総会後、17時30分

懇親会

場所 ホテルニューオータニ博多

(福岡市中央区渡辺通

1-1-1-2)

平成22年の福岡同窓会のキャッチフレーズ(案)は「同心の友集まりて 濟々鬻の原点、三綱領を口ずさもう」―出てからが永い濟々鬻―というもので特別講演は、国際医療福祉大学太田恵一朗教授(昭和47年卒)が行ない来賓として鬻長先生の外恩師、本鬻、北九州、広島同窓会役員などの出席が予定されており、参加者は250名超の見込みだそう、東京同窓会としても福岡同窓会の盛会を祈念いたします。

東京同窓会事務局だより

副会長に林田紀久男先輩（昭和33年卒）が就任されました。この場をお借り致しまして、ご快諾いただいたことに感謝を申し上げます。そして、濟々黌東京同窓会を何卒よろしくお願い致します。

また、長年にわたり幹事長、副会長の要職を歴任され、東京同窓会の纏め役としてご尽力いただきました尾浦武昭副会長（昭和29年卒）が退任されることとなりました。私が事務局長

を引き受ける決心をしたのも、尾浦先輩の、「もし、先輩で訳の分からんこつをいう人がおつたら、いつでも俺に言いなつせ。お前だけに苦勞はさせん！」という心強いお言葉があつたからでした。

幸い、事務局長に就任して約5年間、石原幹事長（昭和40年卒）には、ご相談をさせていた

だくこともありましたが、尾浦

先輩に相談に行くことまではありませんでした。ただ、いざという時は尾浦先輩がいらつしゃるといふ安心感は、様々な同窓会事務の処理の中で実に貴重なものでした。副会長は退任され

ても、あのお言葉はまだ有効だと、事務局長はかつてに解釈をしておりますので、今後とも宜しくお願い致します。長い間本当にご苦勞さまでした。

濟々黌東京同窓会事務局長

郷原友和（昭和53年卒）



◆◆◆編集◆◆◆後記◆◆◆

◆◆◆ 昨年の東京同窓会総会後、同期の石原君（東京同窓会幹事長・同窓会常任幹事、事務局長を歴任）から小生に平成22年の「多士東京」の編集は、我々昭和40年が担当につき、宜しくとの話

◆◆◆ うに、今なお「時代の思潮は混沌」としているが、いかな世、時代であっても背筋を伸ばし、正々堂々と生きていくための指針、バックボーンとしての三綱領を与えてくれた母黌に感謝している。

◆◆◆ 局を立ち上げた。編集局のメンバーは、石原君、益田君、相良君に私である。メンバーの殆んどはまだ現役で一同に会しての打ち合わせは行い難く苦勞した。なかんずく原稿集めを懸念したが、幸いにして石原君は顔が広く、同窓生に幅広く知己を持つており、大助かりであった。

◆◆◆ 本号のキャッチフレーズは、「黄紐の襷・たすき・は世代を超えて」とした。我々の在黌時の女生徒は各学年十人程度であったが、今や女生徒数は半数に達し、また、本館も黌舎も新しくなった。しかし、濟々黌の伝統精神は、黄紐を襷にして世代を超えて後輩諸君に引き継がれる。このことの確認である。

◆◆◆ 編集に当たり、快く御寄稿頂いた諸先輩、同窓生の諸君に対し、この欄をお借りして深甚の謝意を表します。

◆◆◆ 間違はなく濟々黌魂は連綿と引き継がれていくことを信じて疑わない。多士東京も続いていく。

◆◆◆ 末田修治（昭和40年卒）

◆◆◆ 編集作業を通じて、改めて濟々黌の有難さ、大きさに思いをいたし、濟々黌卒業生であることの矜持を持つことの大切さを思う。

◆◆◆ 本号の編集委員名

◆◆◆ 石原 純、益田修治、相良久次郎、末田修治

◆◆◆ 濟々黌50周年記念歌にあるよ